

## 第一分科会の提案

## ～ 里山資源を活用し地域を豊かにするには ～

## 【里山の現状】

三島地域は面積の約6割を森林が占めています。先人たちは、杉を植林し、それらを建材などにすることで生活の糧としながら里山を活用し、野生動物と共存を図ってきました。

しかし、近年は過疎・高齢化などの社会生活の変化により里山が活用されず、耕作放棄地が増え、荒廃が進み、治山治水機能の低下による災害の誘発がみられるほか、野生動物の生息域が拡大し、獣の被害が発生しています。

## 【豊かな里山資源の活用】

他地域では、里山保全や里山資源を活用した特産品の開発や体験をなど、自然を活かした取り組みを通じて地域活性化を図っている団体が数多くあります。三島地域においても木質資源などの再生可能エネルギーを活用した施設を設置するなど、里山資源を自発的に活用している団体もあります。

再生可能エネルギーを活用した施設によって安定的な農業生産活動が維持されれば、エコ・ブランドとしての付加価値を付けた商品開発や販売、新たな雇用の創出による地域活性化が期待できます。こうした団体に対して、自立して運営ができる仕組みづくりやビジネス化に向けた支援を積極的に行うことが必要だと考えます。

## 【里山資源の活用によるコミュニティの形成と里山の今後】

学校では米作りや学校林の整備などを通じて、自然と触れ合う活動が行われていますが、学校だけでなく、里山が子どもからお年寄りまで「世代を越えた交流の場」としての役割を果たすことを望みます。

お年寄りの長年培ってきた自然を活かした知恵や技術を、自然と触れ合いながら子どもたちに体験してもらうことで、豊かな感性が育まれるとともに知恵や技術が伝承され、世代を超えたコミュニティが形成されます。

また、山菜や果樹などの里山に自生する植物を育成し、持続的な採取が可能になれば自然体験を通じた多世代交流や都市部との交流が期待でき、地域活性化に繋がります。

里山は生活に結びついた自然であり、人の手が入ることで維持されてきました。人と自然とのバランスがとれた美しい里山こそが本来の「三島の宝」です。里山を野生動物と共存を図りながら自然災害の発生を抑止するという、先人たちが築き上げた姿に回帰させることが、地域を豊かにすることに繋がっていくと思います。

## 第二科会の提案

## 《三島地域内における公園の活用について》

第二分科会では、三島地域内にある公園に注目し、地域内の主要な公園7か所を視察し、公園のあり方・利用のされ方について話し合いを行ってきました。その中で、三島地域の中心的な場所に位置する三島中央公園(以下、中央公園)を、多くの人が集い愛着の持てる公園にすることが、三島地域を元気にする手段の一つであると、その方策を検討してきました。

## 【中央公園の現状と課題】

中央公園は平成8年度にオープンし、当初は三島地域で初めての大型公園で遊具も新しく、夏は三島まつり会場だったこともあり、知名度が上がり多くの人々が集っていました。平成18年度からまつり会場が現在のみしま体育館駐車場に移ったこともあり、人々の関心が向かなくなり、利用者も年々減ってきています。現在では保育園児の散歩コースや児童の遊び場、グランドゴルフの練習場所などで利用されている状況です。

東屋周辺の池では、西山丘陵からの湧き水を引き込み、池の周りには菖蒲が綺麗に咲いていましたが、水量の確保ができなくなったこと等から水が溜まったままで、虫が湧く不衛生な状態です。

また、生垣が高く、道路などまわりから公園内の様子が見えづらくて、子どもの遊び場としては、防犯上好ましくない状態です。

地域内外での認知度が低いことから、木々で隠れている案内看板の改善や、車でも遊びに来やすくするため、駐車場の整備も必要ではないかと感じています。

## 【公園に対する活動と想い】

第二分科会で、行政担当者と中央公園の建設時のコンセプトや駐車場を整備する場合に地盤的・技術的に可能かどうか等、様々な意見交換を行い、防犯対策に詳しい方からは、子どもたちが安全に安心して遊べる公園にするための注意点を指導してもらい、一部の生垣や樹木の剪定作業を行いました。

また、地域の方々とワークショップを行い、中央公園の課題や理想の公園等について幅広く意見をいただいた中で、「越後みしま 竹あかり街道」や「みしまルシェ」などの集客イベントが行えるようにしたらなど、分科会で考えていた以上に素晴らしい提案がありました。また、脇野町小学校の児童も、いつも遊んでいる中央公園を良くしたいという想いから、「東屋や藤棚などを花で装飾する」「木々にニックネームを付け親しみを持てるようにする」など、多くの提案をしてくれました。

このように、中央公園に関心を持ち、集える場所にしたいと考えている人が、世代を問わずたくさんいることがわかり、嬉しく感じるとともに、この「想い」が今後の中央公園の活用につながっていけばと感じています。

## 【愛着の持てる公園にすることが】

多くの世代の方が、少しずつでも中央公園に目を向け関心を持ってもらうことで、管理や運営に関わってくれる人を増やし、愛着の持てる公園に変えていくこと、そして『越後みしま 竹あかり街道』や『みしまルシェ』などのイベント開催との連携により多くの人が集うことで、コミュニティ活性化の好循環が生まれてくるのではないのでしょうか。今後も中央公園の活用を継続して考えること・関心を持ってもらうことが、三島地域の活性化につながると思います。

平成 29 年 3 月 日

三島地域委員会 委員長 永島 圭子

三島地域委員会では、二つの分科会を設置して、2年間にわたり三島地域の活性化の方策について検討を重ねてきました。

その結果を踏まえ、三島地域における地域の宝“三島の里山”の活用と、多世代の人が集えるような“公園”を核とした「コミュニティ活性化の好循環」が、『元気な三島地域』の醸成につながる取り組みの一つではないかと考えました。

### ◆里山資源を活用し地域を豊かにするには：第一分科会

#### 【里山の現状】

三島地域は面積の約6割を森林が占めています。先人たちは、杉を植林し、それらを建材などにすることで生活の糧としながら里山を活用し、野生動物と共存を図ってきました。

しかし、近年は過疎・高齢化などの社会生活の変化により里山が活用されず、耕作放棄地が増え、荒廃が進み、治山治水機能の低下による災害の誘発がみられるほか、野生動物の生息域が拡大し、獣の被害が発生しています。

#### 【豊かな里山資源の活用】

他地域では、里山保全や里山資源を活用した特産品の開発や体験をなど、自然を活かした取り組みを通じて地域活性化を図っている団体が数多くあります。三島地域においても木質資源などの再生可能エネルギーを活用した施設を設置するなど、里山資源を自発的に活用している団体もあります。

再生可能エネルギーを活用した施設によって安定的な農業生産活動が維持されれば、エコ・ブランドとしての付加価値を付けた商品開発や販売、新たな雇用の創出による地域活性化が期待できます。こうした団体に対して、自立して運営ができる仕組みづくりやビジネス化に向けた支援を積極的に行うことが必要だと考えます。



#### 【里山資源の活用によるコミュニティの形成と里山の今後】

学校では米作りや学校林の整備などを通じて、自然と触れ合う活動が行われていますが、学校だけでなく、里山が子どもからお年寄りまで「世代を越えた交流の場」としての役割を果たすことを望みます。

お年寄りの長年培ってきた自然を活かした知恵や技術を、自然と触れ合いながら子どもたちに体験してもらうことで、豊かな感性が育まれるとともに知恵や技術が伝承され、世代を超えたコミュニティが形成されます。

また、山菜や果樹などの里山に自生する植物を育成し、持続的な採取が可能になれば自然体験を通じた多世代交流や都市部との交流が期待でき、地域活性化に繋がります。

里山は生活に結びついた自然であり、人の手が入ることで維持されてきました。人と自然とのバランスがとれた美しい里山こそが本来の「三島の宝」です。里山を野生動物と共存を図りながら自然災害の発生を抑止するという、先人たちが築き上げた姿に回帰させることが、地域を豊かにすることに繋がっていくと思います。

裏面に続きます

## ◆三島地域内における公園の活用について：第二分科会

第二分科会では、三島地域内にある公園に注目し、地域内の主要な公園7か所を視察し、公園のあり方・利用のされ方について話し合いを行ってきました。その中で、三島地域の中心的な場所に位置する三島中央公園(以下、中央公園)を、多くの人が集い愛着の持てる公園にすることが、三島地域を元気にする手段の一つであると、その方策を検討してきました。

### 【中央公園の現状と課題】

中央公園は平成8年度にオープンし、当初は三島地域で初めての大型公園で遊具も新しく、夏は三島まつり会場だったこともあり、知名度が上がり多くの人々が集っていました。平成18年度からまつり会場が現在のみしま体育館駐車場に移ったこともあり、人々の関心が向かなくなり、利用者も年々減ってきています。現在では保育園児の散歩コースや児童の遊び場、グランドゴルフの練習場所などで利用されている状況です。

東屋周辺の池では、西山丘陵からの湧き水を引き込み、池の周りには菖蒲が綺麗に咲いていましたが、水量の確保ができなくなったこと等から水が溜まったままで、虫が湧く不衛生な状態です。

また、生垣が高く、道路などまわりから公園内の様子が見えづらくて、子どもの遊び場としては、防犯上好ましくない状態です。

地域内外での認知度が低いことから、木々で隠れている案内看板の改善や、車でも遊びに来やすくするため、駐車場の整備も必要ではないかと感じています。

### 【公園に対する活動と想い】

第二分科会で、行政担当者と中央公園の建設時のコンセプトや駐車場を整備する場合に地盤的・技術的に可能かどうか等、様々な意見交換を行い、防犯対策に詳しい方からは、子どもたちが安全に安心して遊べる公園にするための注意点を指導してもらい、一部の生垣や樹木の剪定作業を行いました。

また、地域の方々とワークショップを行い、中央公園の課題や理想の公園等について幅広く意見をいただいた中で、「越後みしま 竹あかり街道」や「みしまルシェ」などの集客イベントが行えるようにしたらなど、分科会で考えていた以上に素晴らしい提案がありました。また、脇野町小学校の児童も、いつも遊んでいる中央公園を良くしたいという思いから、「東屋や藤棚などを花で装飾する」「木々にニックネームを付け親しみを持てるようにする」など、多くの提案をしてくれました。

このように、中央公園に関心を持ち、集える場所にしたいと考えている人が、世代を問わずたくさんいることがわかり、嬉しく感じるとともに、この「想い」が今後の中央公園の活用につながっていけばと感じています。



### 【愛着の持てる公園にすることが】

多くの世代の方が、少しずつでも中央公園に目を向け関心を持ってもらうことで、管理や運営に関わってくれる人を増やし、愛着の持てる公園に変えていくこと、そして『越後みしま 竹あかり街道』や『みしまルシェ』などのイベント開催との連携により多くの人が集うことで、コミュニティ活性化の好循環が生まれてくるのではないのでしょうか。今後も中央公園の活用を継続して考えること・関心を持ってもらうことが、三島地域の活性化につながると思います。

### 《最後に・・・》

“三島の里山”と“公園”を核とした取り組みを行うこと・・・、地域が一体となって取り組んでいく『過程』こそが重要です。今後も市民が主体のコミュニティ活動を推進し、三島地域を誇りに思う心と愛着を醸成し、安全で安心なまちづくりを進めていく事が、三島地域の活性化に繋がる取り組みの一つであると考えます。